

Title	Sukhāvativyūha(梵文無量壽經)東方偈の研究
Author(s)	福井, 真
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1995, 29, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10440
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Sukhāvativyūha (梵文無量寿経) 東方偈の研究

福井 真

1. Sukhāvativyūha (Sukh) には所謂帰敬偈、讃仏偈(歎仏偈)、重誓偈、聞信偈、東方偈(往觀偈)、流通偈の6群の偈頌がある(荻原本は更に縁起法頌を含む)。Sukh は仏教混淆サンスクリット語(BHS)で書かれているが、韻文には中期インド語(Mi.)の影響が色濃いものから、かなりサンスクリット語(Skt.)化が進んだものまでである。

修士論文(1995)では、藤田宏達著『梵文無量寿経写本ローマ字本集成』¹⁾に基づき、東方偈に関して各写本の比較とテキストの語句の検討を行うとともに、その韻律・語形・思想的特徴を考察した。本稿ではその成果の一部を発表する。この韻文が Sukh の成立・発展にどのように関るのかを探るのが最終的な目的である。

2. [概要] この韻文群は Sukh の後半部に属し、阿弥陀仏の前世の誓願の成就の結果である極楽(sukhāvati-)の荘嚴の描写中に位置する。Sukh には5本の漢訳と Tib. 訳とがあり、東方偈は『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』以外の全異本に存在する。但し、『無量清浄平等覚経』と『無量寿経』においては、Sukh で東方偈より後に離れて独立する流通偈と連続した形になっている。内容の点では『無量清浄平等覚経』と Tib. がかなりよく梵本に対応する。

東方偈全体はアーナンダに対する釈尊の言葉として述べられる。第1～4偈：東西南北の多くの住处から諸菩薩が極楽に来て、阿弥陀仏に花と塗

香を撒きかける。 — 第5～7偈：彼らが阿弥陀仏に挨拶し、輝く極楽を讃嘆。花を撒くと、花々が大きな傘となり、仏の全身を覆う。 — 第8～9偈：阿弥陀仏の名を聞くことで得られる利得。 — 第10偈：阿弥陀仏の光明・熱射力・寿命・僧団は無量である。 — 第11～12偈：阿弥陀仏が微笑むと、その微笑が光焰として千・千万の住処を満した後、再び頭頂に戻って沈む。 — 第13～16偈：観音菩薩が微笑の理由を尋ねる。 — 第17～18偈：阿弥陀仏は、「衆生たちが自分の名を聞けば必ず自分の住処に来るように」という以前の誓願が成就したからであると答える。 — 第19～21偈：阿弥陀仏のように衆生を解脱させたい菩薩は、速やかに極楽に行くようにと釈尊が勧告する。

3. [韻律] 韻律は第2, 4偈が *mātrāchandas*、それ以外の19偈が *trīṣṭubh/jagati* である。特に注記すべき諸点のみを以下に考察する。

3.1. 第2偈 *bahupūṣpaṭāṃ gṛhīva te (gṛhīva)*²⁾

nānāvārṇa surabhī manoramāṃ /
okiranti naranāyakottamaṃ
amita-āyu naradevaṇṇajitaṃ //

種々の色をもち、香しく、心楽しませる、多くの花の
 (入った)袋を取り、彼ら(諸菩薩)は、人間の最高の
 指導者である、人々と神々によって供養されたアミタ・
 アーユ(ス)(無量の寿命を有する者)に撒きかける。

第4偈 *bahugandhapūṭāṃ ...* (以下第2偈と同一) //

……多くの塗香の(入った)袋を……

両偈ともに次の韻律形態を示す。

a: ◡◡◡◡ — ◡◡◡◡ b: — — — ◡◡◡◡ — ◡◡◡◡

c: ———— ———— d: ———— ————

a 句は *vaitāliya* の *pāda*、c 句は *aparāntikā* の *pāda*、d 句は *vait.* とも *aparā.* とも解せる。³⁾ b 句は *opening (opg.)* が 9 *mātrā* であるが、*comp.* の第 1 構成要素の語末の長母音が短になる現象は一般的に見られるので (Geiger §33.2; cf. *Ai. Gr.* II/1, p. 134), *nānā-°* を *nāna-°* と訂正すれば、d 句同様に *vait.* とも *aparā.* の *pāda* とも見なすことができる: (*—————)。bcd 句の形から、a 句をも含む詩節全体が本来 *aparā.* で作成された可能性もあるが、これを裏付ける異読はない。尚、本経前半部の讚仏偈・重誓偈の韻律も *mātrāchandas* の一種である *aupacchandasaka* であることが注目される。

最初の 4 偈に関しては、諸写本間の異同が著しい。まとめると次の表のようになる (○は偈全体の存在、×は偈全体の脱落、○○は重複を含むこと、△は部分的な脱落を示す)。

図 1

	R	N1	T1	T5 など28本	Ky, T3
1 (<i>tri./jag.</i>)	○	○	△	△	△
2 (<i>mātrāch.</i>)	○	○	○	○	○○
3 (<i>tri./jag.</i>)	○	×	×	○	○
4 (<i>mātrāch.</i>)	○	×	×	○	○

第 3, 4 偈の表現は第 1, 2 偈に極めて類似する。最初の 4 偈とそれ以外の偈頌とは本来別系統のものである可能性が高い。

3.2. 東方偈の *tri./jag.* を考える場合、頻出する語頭の二重子音の価値が問題になる。語頭の二重子音は *Mi.* で単子音になる (Pischel §268; Geiger §51.2, §66.1; v. Hinüber §162)。しかし、本来存在した二重子音が、*metri causa (m.c.)* で母音の後で再び現れることがある (Geiger

§74.1)。また、comp. の第2構成要素の語頭の二重子音は、原則的に語中の二重子音と同じ扱いであるが、独立した語の語頭の二重子音同様に単子音として現れることもある (Pischel §196, §268; cf. Geiger §51.2, §67)。BHS では、子音グループとして書かれていても単子音の価値と考えられる場合がある (cf. BHSg 2.84)。

opg. で二重子音の価値とほぼ確定できるものは *smitam* (13d), *kṣetram* (16a) だけであり、それ以外は単子音の価値かどちらでも良いか、或は価値が確定できない (6d, 9c, 11d, 18c, 19b)。価値が不確定の二重子音は、全て tri./jag. の opg. の第3音節の長短に関連する。今問題以外の箇所では、第3音節は全て短である：— — — (43 pāda), — — — (23 pāda), — — — (5 pāda, 句頭の resolution — → — を含む)。従って、価値が不確定の二重子音は単子音の価値で、ここでも第3音節は短である可能性が高い。

break では、全て単子音の価値か、或は価値が確定出来ない (7a, 16b)。後者は全て break の第3音節の長短に関連する。それ以外の場合は、第3音節は全て短である：— — — (62 pāda), — — — (8 pāda), — — — (3 pāda, 冒頭の resolution を含む)。従って、ここでも問題の二重子音は単子音の価値を持ち、break の第3音節は短である可能性が高い。

break の第3音節が長となる唯一の例は 14d である：

udagracittā bhaviṣyanti sattvāḥ // — — — — —
 衆生たちは高揚した心を有する者となるでしょう。

しかし、東方偈の tri./jag. 中でこの位置に長を示す句は 14d 以外にはなく、意図的に短にするための語形：*tatha* (8a, 16c), *tada* (17a), *prashhita* (15b, nom. pl. m.) さえ見られる。Pa. Pkt. BHS では fut. を示す -sy- の単子音化が知られている。⁴⁾ 従って、*bhaviṣyanti* (14d) 中の *ṣy* が単子

音の価値であることを想定すべきであろう。

cad. には例外形はない。二重子音の価値を持つと確定できるものは (amita-)prabhasya (5b, 20c) だけで、それ以外は単子音の価値を持つ (5d, 6b, 9b, 12c, 13c)。

以上をまとめると、東方偈の tri./jag. の pāda は次のようになる。⁵⁾

tri. : ○—×—○∪×—∪—

jag. : ○—×—○∪×—∪—

(○は∪, ∪, — の何れも可)

×は価値が不確定の二重子音が関係する箇所を示し、全て短である可能性が高い。

tri. の pāda と jag. の pāda との混合形が現れる点や、initial resolution (opg. の第1音節での —→∪) や internal resolution (break の第1音節での —→∪) が見られる点で、東方偈の tri./jag. は、古典期に upajāti⁶⁾ として固定する以前のものである。また、Pali の一般的な tri./jag.⁷⁾ よりも自由度が制限されているとすることが出来る。

4. 【語形】 東方偈に現れる Mi. 的な特徴を示す語形は以下のものである。

【名詞】 a-stem, nom. sg. -ah>-a: chādanta (chādenti?) (7d), prapūrṇa (18a), śobhanā? (18a); acc. sg. -am>-a: buddha (1c, 3c), svapnopama (9c), kṣetra (9c, 15d), kalpasahasra (9d), śrotra (16c), śīghra(-śīghram)? (20a): dat. sg. -āya>-ā (contraction): buddha-paśyanā? (15b); abl. sg. -ā(t)+-tas (double formation): mukhaman-ḍalātah (11c); loc. sg. (代名詞変化): 'ntikasmim (18c); nom. pl. -āh>-ā (さらに m.c. で -a): kṣetrā (1b), kṣipta (7a), tuṣṭa (8b), sulabdha (8c, 9a), lābha (9a), sarva (12a), prasthita (15b), sattvā (17c),

ekajātiyā? (18d): acc. pl. *-ā* 及び *-a*: *nānāvarṇa* (2b, 4b), *kṣetra* (21b); instr. pl. *-ebhi* (>*-ehi*): *puṣpapūṭebhi* (*^o-*pūṭehi*) (6a); gen. pl. *-ānām*>*-ānaṃ*>*-āna*: *buddhāna* (1b, 3b, 20d, 21a), *sugatāna* (21c) — *-ā*-stem, acc. sg. *-ām*>*-am*: *katham* (*kathā?*) (8b); oblique case, sg. *-āya* (>*-ā*: contraction): *gaṃgāya* (1a), *atulāya* (6b), *buddha-ṣāyanā?* (15b); acc. pl.: *kathā* (*katham?*) (8b) — *-ī*-stem, nom. sg. *-īḥ*>*-i*: *praṇidhi* (17b, 18a); acc. sg. *-ī*: *sukhāvātī* (21d); instr. sg. *-īye*: *prītiye* (6b); gen. sg. *-īya*: *nadīya* (1a); nom. pl. *-īḥ*: *arcīḥ* (12a); acc. pl. *-ī*: *surabhī* (2b, 4b), *sahasrakoṭī* (20d), *koṭī* (21a) — *-ū*-stem, nom. sg. *-ur*>*-u*: *amitāyu* (11a, 17a); acc. sg. *-um*>*-u*: *amitāyu* (1d, 3d), *amita-āyu* (2d, 4d); acc. pl.: *bahu* (19c, 21ab) — *-an*-stem, loc. sg.: *mūrdhne* (12b).

[名詞語幹の変化] *āyus*->*āyu-*? (1d, 2d, 3d, 4d, 11a, 17a), *śāstr-*>*sāstu-* (9d), *arcis*->*arci-* (12a), *nāman*->*nāma-* (17c)

[人称代名詞] 1st. pers., instr. pl.: *asmehi* (9a); gen. pl.: *asma* (6d) — 2nd. pers., gen. sg.: *ti* (<*te*) (14c) — 3rd. pers., instr. pl.: *tehi* (8c)

[関係代名詞] instr. pl. *yehī* (8d)

[近称代名詞] acc. sg.: *ima* (9b)

[疑問代名詞] nom. sg.: *ko* (母音 *o* が短母音の価値、13c)

[動詞] pres. ind.: *okiranti* (3. pl., 2c, 4c, 6a), *kathentī* (3. pl., 8b), *(^o)*sma* (1. pl., 9b), *karotī* (3. sg., 11a), *kurvasi* (2. sg., 13d), *enti* (3. pl., 18b), *bhont(i)* (3. pl., 18d) — opt.: *siya* (3. sg., 6d, 19b), *prāpuni* (3. pl., 16b), *vrajeyu* (3. pl., 17d) — impv.: *ṣāyātha* (2. pl., 9c, 10a), *vyākaroḥī* (3. sg., 14a) — fut.: *bhaviṣyanti* (3. pl., 14d) (*ṣy* が単子音の価値 cf. 注 4) — aor.: *iṣ*-aor. 型: *āgami* (3. pl.,

1c, 3c), *saṃsthihi* (3. sg., 7b), *astamgami* (3. pl., 12b); s-aor. 型 : *abhūsi* (3. sg., 17b) — caus. : *chādenti* (*chādanta?*) (3. pl., 7d), *janetvā* (15c), *pūjetu* (3. sg. impv., 20d) — grd. : *pūjīva* (5a), *vandīva* (5b), *śrutva* (15c), *śruṇiyāna* (17c), *kṛtvāna* (21c)

[不変化詞] *tatha* (3a, 8a, 16c), *cā* (5a), *purasta?* (6c), *pī* (9a), *tada* (17a), *pī* (17c, 19c), *(i)ha* (18d), *(i)ya* (*(i)ha?*) (19a)

Mi. の特定の方言を指示すると推測される語形は、一人称代名詞の *asma* と *icchatiya* だけである。*asma* (6d) は Pischel §419 によると *Maharāṣṭri* と *Jaina-maharāṣṭri* とだけに記録されている *amha* に対応すると考えられる (Pkt. の代表形は各方言を通じて *amhe*)。 *icchatiya* (19a) は写本 R, N1 だけに現れるが、もし *icchati+iha* と解するならば、中期インド西北方言に見られる *h* の脱落の可能性が考えられる (Brough §39; v. Hinüber §223)。

尚、少数だが中期インド西北方言に見られる語形、或はそれから崩れたものと考えられる語形が写本に現れる : *parivṛtuḥ* (<-u<-o : nom. sg., 10b, R)?, *amitāyu* (acc. sg., 1d, 3d; nom. sg., 11a, 17a), *nāmu* (acc. sg., 8d, R), *kṣipram* に対する *kṣipru* (15d, N1), *imu* (acc. sg., 15d, N1) など。このような例は全体としては少ないが、最古の写本 R, N1 に多く現れることから、成立時に東方偈が西北インドと何らかの関連があったと考えられる。

5. [写本] 最古の2写本である R, N1 のうち、欠落部分が少ない R が従来最重要視されて来た。東方偈を見る限り R の読みの信頼性は確かに他と比べて高いものの、崩れた読みを示す場合がある (以下藤田本参照) : e.g. *cā* に対する *cān* (5a); *puṣpapūṭebhi* (*^o-*pūṭehi*) に対する

°-*puṭohi* (6a); *prītiye* に対する *prītaye* (instr. sg., 6b); *parīvṛto* に対する *parīvṛtuk* (10b); *tāh* に対する *tām* (12a) など。また、動詞形や名詞などの語尾の現れ方に関して、R が Skt. 化の進んだ語形を示し、他の写本が古形を示す場合がかなり見られる : e.g. R *kṣetrām*, R 以外 *kṣetrā(h)* (1b); R *gṛhītā*, R 以外 *gṛhītva te* (2a); R *tatra tuṣṭah*, R 以外 *tuṣṭa tatra* (8b); R *praṇidhir*, R 以外 *praṇidhi* (17b); R *satvāh*, R 以外 *satvā* (17c); R *koṭim*, R 以外 *koṭi* (21a) など。このために単純に R の読みを採用する訳にはいかない。

大別して R, N1 と Ky, T3 の両グループに読みが分かれる場合が多く、それら以外の他写本の読みは基本的に Ky, T3 の系統の読みに近い : 1) R, N1 とその他の写本の読みに分かれる例 : R, N1 のみ *purimena ... sambodhisatvā*, その他脱落 (1b-c); R, N1 *okiranti*, その他 *ukiranti* (2c); R, N1 *cā(n)*, その他 *vā* (5a); R, N1 *manokiranti*, その他 *punokiranti* など (6a); R *vācam*, N1 *bahu*, その他 *kāmaṃ* (6c); R, N1 *tai(h)*, その他 *ye* (7a); R, N1 *kathā kathentī*, その他 *kathā karontī* (8b); R, N1 *tatra tuṣṭah*, その他 *tuṣṭa tatra* (8b); R, N1 *kṣetra*, その他 *maitra* など (9c); R, N1 *smita*, その他 *svasmitaṃ* など (11a); R *arcīh*, N1 *arcci*, その他 *surīh* など (12a); R, N1 *ko*, その他 *ka(h)* (13c); R, N1 *paramārthakovidā*, その他 *yatra sorthakovidō* など (14a); R, N1 *enti*, その他 *ebhi(r)* (18b); R, N1 *te ntikasmin*, その他 *antikesmin*, *entikasmin* (18c) など。 — 2) Ky, T3 とその他の写本の読みに分かれる例 : Ky, T3 *vanditum buddha āgami*, その他 *āgami buddha vanditum* (3c); Ky, T3 *pravadanti*, その他 *vadanti* (5c)。

Ky, T3 に近い読みを示す写本群中では、まず T5, T4, K6, K7, T2, B, O2 は一つのグループを形成すると考えられる : e.g. T4 — O2 *pralabhāṃ, parabhī* など, その他 *surabhī* (2b); T5 — O2 *ukiranti*, その他

okiranti (4b); T5 — O2 *divyapuṣpaṇḍā*, その他 *puṣpaṇḍā* (7a); T5 — O2 など *śobhavati*, その他 *śobhati* (7c); T5 — O2 など *taihi*, その他 *tehi* (8c); T5 — O2 *bhavanā* など, その他 *śobhanā* (18a); K6 — O2 *ekajāti*, その他 *ekajātiyā* (18d) など。尚、このグループが R, N1 に近い読みを示す場合があることも注意すべきである: e.g. R, N1, T5 — O2 *nāmnātha*, その他 *nātha* (13b)。

Ox, H1, K4, Ro, Ko, K3, K5 もまとめて類似する読みを示す: e.g. Ox — K5 *śāstuḥ*, その他 *śāstunā* (9d); Ox — K5 *vala*^o, その他 *vara*^o (10a); Ox — K4, Ko — K5 ^o-*kotyah*, その他 ^o-*koṭi*(*h*) (11d); Ox — K4, Ko — K5 脱落, その他 *tā*(*h*), *tām* (12a); Ox — K4, Ko — K5 *ca bhavanti*, その他 *bhaviṣyanti* など (14d); Ox — K4, Ko — K5 *abhūṣi* など (17b); Ox — K4, Ko — K5 *śīghraṃ ca śīghraṃ*, Ro *sa śīghraṃ ca śīghraṃ*, その他 *sa śīghra*(*m*)*śīghraṃ* (20a) など。このうち Ko, K3, K5 は非常に近い関係にある: e.g. Ko — K5 *bodhisatvā*, その他 *bahubodhisatvā* (5a); Ox, Ko — K5 *śoraṃkṛtaṃ*, その他 *svalaṃkṛtaṃ* (7c); Ko — K5 *paśyārtha*, その他 *paśyātha* (9c)。このグループ中で、Ro は K1, T6, S 及び C, As, K2, H2, T1 のグループと近い読みを示す場合がある: e.g. Ro, C — T1 *nti*, その他 *bhaviṣyanti* など (14d); K1 — S, Ro, C — T1 *ca bhūvi*, その他 *abhūṣi* など (17b)。

L, N3, N4, O1, O3, N2, Kt は高い確率で対応する: e.g. L — Kt *atula*, その他 *atulāya* など (6b); L — Kt *bhagavann atra*, その他 *atra bhagavan* (13c); N4 — Kt のみ *vasatvā*, その他無し (15a); N3 — N2 *praspita*, その他 *prasthita* (15b); Ky, T3, L — Kt *ca bhūmi*, その他 *abhūṣi* など (17b)。

K4 では *ṣ* と *kh* の交代が頻繁に起こる: e.g. ^o-*pukhya*- (= ^o-*puṣpa*-) (2a); *prabhākhamti* (= *prabhāṣanti*) (6c); *khattriṣa*^o (= *ṣaṭtrimṣa*^o)

(11b); *arcikhāṃ* (= *arciṣāṃ*) (11b); *manukhyā* (= *manuṣyā*) (12c); *śuṣāvati* (= *sukhāvatiṃ*) (20b, cf. 21d) など。

6. [思想内容]

6.1. [阿弥陀仏の名称] 東方偈では *amitāyu* (1d, 3d, 11a, 17a), *amita-āyu* (2d, 4d), *amitaprabha* (5b, 20c) が固有名詞、或はそれに近い語として現れる。これに対し、東方偈を除く Sukh 全体では *amitābha* が33回、*amitāyus* は9回現れる。*amitaprabha* は4回現れるが、そのうち阿弥陀仏を指すのが2回⁸⁾である。東方偈には *amitābha* が一度も現れない代わりに *amitaprabha* が現れることと、*amitāyu(s)* の現れる頻度の高さが注目される。

以下は、それらの語の東方偈での現れ方と Tib. との対応関係である。第1～4偈とそれ以外の偈頌を区別して示す(3.1.参照)。

図2

該当箇所 (Skt.)		Tib.	対応
1d, 3d	<i>amitāyu</i> (acc. sg.)	<i>'od dpag med</i> (無量の光明を有する者)	×
2d, 4d	<i>amita-āyu</i> (acc. sg.)	<i>tshe dpag med pa</i> (無量の寿命を有する者)	○
5b	<i>amitaprabhasya</i>	<i>dpag med 'od</i> (無量の光明を有する者)	○
11a, 17a	<i>amitāyu</i> (acc. sg.)	<i>tshe dpag med</i> (無量の寿命を有する者)	○
20c	<i>amitaprabhasya</i>	<i>'od dpag med</i> (無量の光明を有する者)	○

1d, 3d の *amitāyu* は Tib. と意味上対応していない。この点に関しては、*amitāyus* は中期インド西北方言での **amidāu* (<**amidāhu*<**ami-*

tābhu : nom.-acc. sg.) の再解釈ではないかという推測が注目される。⁹⁾ Tib. の信頼性は高くはないものの、この箇所はこの推測を裏付ける可能性がある。また、このような不一致が、他の偈頌とは別系統と思われる最初の4偈にのみ現れることは注目される。¹⁰⁾

6.2. [衆生救済の手段] 第19偈では、阿弥陀仏の名や音声や(姿を?) 見ること (*nāmena ghoṣeṇa darśanena*) が挙げられる。「名前によって」の内容は、第17偈の内容に一致する。「音声」に関しては、散文部分の「極楽の木々や河の音」、或は讚仏偈の「仏の声は無限の響きを有する」(*buddha-svaro ananta-ghoṣaḥ*, 7.10, 2b) という記述が想起される。また、「(姿を?) 見ること」とは、15b の記述から「阿弥陀仏を見ること」という意味である可能性が高い。これは散文での臨終見仏(臨終来迎)・夢中見仏の思想に対応するものと考えられる。

6.3. [誓願] 誓願 (*praṇidhi*-) は 17bc に単数で現れ、「衆生が阿弥陀仏の名前を聞けば、必ず極楽に来る」ことを指す。散文の誓願中で聞名の内容を含むものは第18, 19, 34-36, 40-44, 46, 47願の12願である。聞名の内容は、24願経の『大阿弥陀経』では第4, 5願だけに現れるが、48願経では梵本と同じように頻出する。東方偈で聞名のみが誓願として挙げられていることは、これが阿弥陀仏の誓願の中核であった可能性を示唆する。

6.4. [菩薩の修行の階位] 東方偈に見られる仏教思想上の述語概念としては、18d に現れる *avivartikā* と *ekajātiyā* が注目される。

18d *avivartikā bhontiha ekajātiyā* //

ここで、(衆生たちは) 逸脱しない者、

一つの生れに属する者となる(一生の間に逸脱しない者となる)。

avivartikā は一般的に「不退転」と訳され、BHSD によれば同義語とし

て *avaivartika-*, *anivart(i)ya-*, *avivart(i)ya-* などが知られる。しかし、Pāli では「不退転」の意味では *vi-√vṛt* ではなく、*ni-√vṛt* の派生語 (*anivattana* など) が用いられる。*vi-√vṛt* は「退く」というよりも正確には「(正しい道から) 外れる、逸脱する」という意味と考えられる。Sukh では類似する表現として以下のものが現れる。

図 3

何から	該当箇所 (足利本)	用例 (括弧内に主語を示す)
正等覚	21. 5	<i>avaivartikā ... anuttarāyāḥ samyaksambodher</i> (菩薩)
	43. 12, 48. 15	同上 (衆生)
	63. 4	<i>vivartante ... anuttarāyāḥ samyaksambodher</i> (菩薩)
	42. 7	<i>avaivartikatāyāṃ ... anuttarāyāḥ samyaksambodher</i> (衆生)
正等覚	63. 11	<i>avaivartikāṃs ... anuttarāyāṃ samyaksambodhau</i> (衆生)
	66. 13	<i>avaivartyā ... anuttarāyāḥ samyaksambodher</i> (衆生)
仏の教え	21. 11	<i>avaivartikā ... buddhadharmebyo</i> (菩薩)
なし	61. 3	<i>pariṇiṣpannānāṃ avavartikānāṃ</i> (菩薩)
	67. 3	<i>bodhisattvānāṃ avavartikabhūmipravesaḥ</i> (菩薩)

これらの用例の頻度から、東方偈の衆生に関する記述は、「正等覚 (*samyaksambodhi-*) (への道程) から逸脱しない」という意味の可能性が高い。

ekajātiyā という語形は nom. pl. m. とも instr. sg. fem. とも解することが出来る。前者の場合、*ekajāti+ya-* で、所謂「一生所繫 (一生補処)」、すなわち「今生を終えれば、次の生涯には仏になることが約束されている (菩薩)」という意味と考えられる。つまり、Sukh の他の箇所 (散

文)に現れる *ekajātipratibaddha-* に対応するものと考えられる(衆生に
 関して: 足利本14.14; 菩薩に関して: 48.24)。instr. sg. と解する場合は
 期間を表わす instr. と見なされ、¹¹⁾ Tib. にも対応する。今の段階では
ekajātiyā の意味は決定不可能である。

東方偈に関する本稿での考察はまだ十分ではない。とりわけ、内容の点
 で多くの問題が残されている。これらは今後の課題である。

注

- 1) K. Fujita, *The Sukhāvativyūha, Romanized Texts of the Sanskrit Manuscript from Nepal*, Part I (1992), II (1993), Tokyo (『梵文無量壽經写本ローマ字本集成』、上・下巻) (東方偈: p. 971-1012)
- 2) 幾つかの写本は *grhitvā* を示す。この場合、韻律上 cad. は -(一)〱 となるが、これは *mātrāchandas* の cad. としては異例である。但し、語中の *tv* に *tw* という svarabhakti を認めれば、正規形である -(一)〱 と解することが出来る。
- 3) *mātrāchandas* は1詩節 4 pāda から成る。vait. (Pāli 段階) は ac: 6 mātrā+〱〱〱 , bd: 8 mātrā+〱〱〱 。特殊な条件下では、opg. が 9 mātrā を示すことがある(例: 〱〱〱〱)。aparā. は $\text{〱〱〱〱〱〱〱〱〱} \times 4$ (cf. aparā. の進んだ形: *rathoddhata* $\text{〱〱〱〱〱〱〱〱〱} \times 4$)。cf. 阪本(後藤)純子「Pāli *Jātaka* に於ける *mātrāchandas* の性格」(仏教研究第7号、1978年2月、p. 155-176)
- 4) 西北インド方言における fut. $\text{-iṣyati} > \text{-iṣati}$ については cf. v. Hinüber §20, §463; Pāli における $\text{-ss-} > \text{-s-}$ ないし $\text{-ss-} > \text{-h-}$ の変化については cf. Geiger §150-153; Prākṛit における同様の变化については Pischel §520-521; BHS においても $\text{-sy-} > \text{-h-}$ の変化が知られており (BHSG 31.12; 31.19-20)、またテキストでは -iṣya- とあるが韻律上単子音(恐らく -iṣa-)であると推測される例がある (BHSG 31.26-29)。更に $\text{-sya-} > (*\text{-ssi-}) * \text{-si-} > \text{-hi-}$ の変化については cf. J. Sakamoto-Goto *Die mittelindische Lautentwicklung von v in Konsonantengruppen mit Verschlusslaut bzw. Zischlaut*, IJ 31, 1988, p. 87-109 (esp. p. 106)
- 5) 但し 3a は opg. と break が不規則な tri. である。

3a *tatha dakṣiṇāpaścimottarāsu* ~~~~~

同様に、南と西と北において……

R, Ky など21写本がこのテキストの形を示すが、これは aupacchanda-saka の ac 句の形と一致する。しかしながら bcd は正規の jag. であり、類似の第1偈も jag. である。藤田本はテキストを訂正して tri. (冒頭の resolution を伴う) と見なす: *tatha *dakṣiṇāpaścima-uttarāsu* (~~~~~)。他の写本の形は、K6 など8本が *tathā dakṣiṇāpaścimottarāsu*, N2, Kt が *tathā dakṣiṇāpaścimottasu* を示す。N2, Kt が示す語形は loc. の崩れた不適当な形。K6 などの形も韻律に合わない。この句が tri./jag. であるとすれば、藤田本の訂正が妥当である。comp. の第1構成要素の語末の短母音が長母音になる現象は一般的である (Ai. Gr. II/1, p. 130; Geiger §33.1; Smith §3.6, §5.1-2)。また、BHS では comp. での hiatus も韻律に応じて許される (BHSG 4.51, 4.54; cf. Geiger §67: Pa. では散文でも許される)。

- 6) 古典期に tri. は *indravajrā*, *upendravajrā* など、jag. は *indravaṃsā* や *vaṃśasthā* などの形に固定される。*indravajrā* と *upendravajrā*、或は *indravaṃsā* と *vaṃśasthā* の pāda が一詩節中に混在する場合、*upa jāti* と呼ばれる: ~~~~~ないし~~~~~。
- 7) ~~~~~×4 ないし ~~~~~×4
- 8) 阿弥陀仏: 27. 15, 55. 7; 世自在王仏: 7. 5; 他の仏: 61. 13 (足利本の頁、行による)
- 9) J. Brough “Amitābha and Avalokiteśvara in an inscribed Gandhāran sculpture”, *Indologica Taurinensia*, vol. X, 1982, p. 65-70; 阪本 (後藤) 純子「Sukhāvativyūha の韻律と言語: 敷仏偈・重誓偈」、印仏研42-2, p. 148-153 (esp. p. 153)
- 10) さらに、第10偈には、「極楽の仏の光明 (*ābhā-*)、熱射力 (*tejas-*)、寿命 (*āyus-*)、(比丘の) 僧団 (*saṃgha-*) は無量である」と説かれるが、Sukh 全体で阿弥陀仏の *tejas-*, *saṃgha-* が無量であるという表現はこの箇所だけである。また、第10, 11偈は、阿弥陀仏の光焰 (*arcis-*) に言及するが、*arcis-* という語は Sukh ではこの箇所以外には現れない。尚、Rāṣṭrapālapariṣṭhā には、阿弥陀仏の前世での名称として「光焰を有する者」(*arciṣmant-*) という表現がある。
- 11) O. v. Hinüber, *Studien zur Kasussyntax des Pāli, besonders des Vinaya-Piṭaka*, 1968, §132

〔省略して引用した文献〕

- 足利本 : A. Ashikaga, Sukhāvativyūha, Kyoto, 1965 (東方偈 : p. 44-47)
- 荻原本 : 荻原雲来、梵和对訳無量壽經 (『浄土宗全書』第23巻、p. 1-191、東方偈 : p. 100, 1.3-p. 110, 1.2)
- Tib. : 河口慧海、藏和对訳無量壽經 (『浄土宗全書』第23巻、p. 213-339、東方偈 : p. 290, 1.6-p. 292, 1.16)
- Pischel : R. Pischel, Grammatik der Prākṛit-Sprachen, Strassburg 1900 (A grammar of the prākṛit languages, tr. by S. Jhā, Delhi, 1981)
- Geiger : W. Geiger, Pāli Literature und Sprache, Strassburg, 1916 (Pāli Literature and Language, tr. by B. Ghosh, Calcutta, 1943)
- v. Hinüber : O. v. Hinüber, Das ältere Mittelindisch im Überblick, Wien, 1986
- BHSD : F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary, New Haven, 1953
- BHSG : F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar, New Haven, 1955
- Ai. Gr. : J. Wackernagel und A. Debrunner, Altindische Grammatik, I II/1 II/2 III, Göttingen, 1896-1957
- Brough : J. Brough, Gāndhāri Dharmapada, London, 1962
- Smith : H. Smith, Les Deux Prosodies du vers bouddhique (Kungel. Human. Vetenskapssamfundets i Lund Årsberättelse, 1949-50, p.1-43)
- (大学院後期課程学生)